

村落社会と「キツネ憑き」「祟り」

—その医療的背景—

大柴弘子

はじめに

- | | |
|------------------|------------------------|
| 1 E村概要 | b お産の時憑かれやすい |
| 2 E村の「キツネ憑き」 | c 病気で体が弱っている時憑かれやすい |
| 1) キツネ持ちの家 | 3) キツネ憑きの意味 ——(以上本号)—— |
| 2) キツネに憑かれた人 | 3 E村の「祟り、さわり」 |
| (1) キツネ憑きと御岳講 | 4 村落社会と祈禱師 |
| (2) キツネ憑きの事例 | 5 「キツネ憑き」「祟り」と現代医療 |
| (3) キツネ憑きとは何のことか | 結語 |
| a 村から出たとき憑かれやすい | |

はじめに

「キツネに憑かれた」とか「祟った」あるいは「さわった」などの問題は、単なる過去の非科学的迷信ではない。その社会においては、現在でもなお存続するだけの、意味をもっている事であると考えている。

いったい「キツネに憑かれた」とは何のことだったのだろうか。「祟り」「さわり」とはどんな意味をもっているのだろうか。又、「キツネに憑かれた人」が祈禱師によってとってもらうとは、どういうことだったのか。科学万能といわれる現代社会の中で、まだ祈禱師が必要とされるのはなぜなのか。

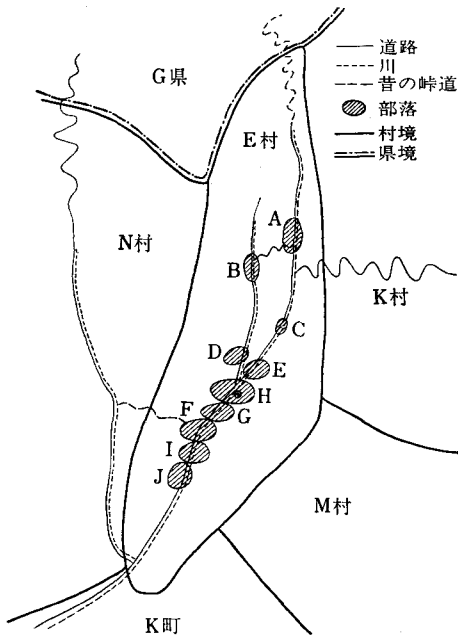
これらが、単なる迷信や非科学的な呪術、呪医的行為であるとかたずけてしまう前に現代の問題として、医療の視点から考えてみたい。そのためには、社会組織構造、経済環境などまずは村落社会の理解が必要となる。ここではE村の社会調査をもとにして「憑依」「祟り、さわり」の事例を中心にみていく。

1 E村概要

E村は中部地方のやや北東部に位置し、海拔800メートル前後の高冷地にある農山村である。交通は一日数本のバスがあるのみで、汽車の駅までは10キロメートルほど離れている。鉄道開通前までは、隣り村と通じる主要幹線道路が峠道を通じこのE村を通過していた。しかし、その後時代の流れと共に変わり、現在は取り残されたいわば行き止まりの山間僻地となっている。

生業は、山林、そ菜、稲作、養蚕を主としているが昔から農業規模は小さく、平均耕地面積1.0ha以下の農家が全体の86.0%以上を占めている。^(注1)ほとんどの家が、山林と辛うじて食べていく程度の農業で細々と生きてきたということであろう。従って、昭和30年代以降の高度経済成長時代を契機として、村の過疎化、人口の老齢化は進行の一途を辿った。若者は村を離れ、村に残る者は村外通勤し、従来の農家世帯はほとんどが第2種兼業農家へと移っていった。昭和32年に専業農家は32.2%あったが、35年には3.7%に減少し、その後減少のまま、昭和50年に4.6%となっている。一方、兼業第2種農家は昭和32年に12.4%、35年に23.7%、そして昭和50年に53.5%と増大している。^(注3)

図I E村の位置と部落の概略



E村は、山間の溪流にそって部落が点存し細長い村を成している(図I参照)。10の部落から成り、それは20戸から60戸前後の集村形態を成し、各部落は2~3、あるいは4~5つの同族集団から構成されていて同族は「マケ」と呼ばれている。^(注4)

通婚圏は、従来部落内婚あるいは隣り村との通婚がほとんどであった。そして、部落により多少の差異があるとしても同族内婚や親類スジを辿った婚姻が、ほとんどであった。^(注5)しかし、村外流出人口が増えだした現世代になって、他県との通婚が急に増えている。最近では、意識的に村内婚を嫌う風潮さえみられ、ほとんどが村外婚になっている。例えばF部落の場合だが、祖父母の世代には、部落内婚11.4%、村内婚42.9%、となり村婚(K村とK町に限る)45.7%だったものが、父母の代で、これ以外の他町村との通婚が12.8%現われ、現世代ではそれが35.0%に増大している。^(注6)

昭和30年代以降、著しく経済環境が変貌する中で日本の村々が名実共に様々な変化を遂げだしたことは、すでに各方面から指摘されているところである。^(注7)この地域一帯においても同様、10年程の村の生活をみてきてさえ、衣食住の外見的变化はさることながら、部落組織・村つきあいなどの社会関係においても様々な変化がみられる。^(注8)

(注1) 1950~1975: 農林業市町村別統計書

(注3) 1950~1975: 村勢要覧, 農林業市町村別統計書

(注4) 蒲生, 1960: 213~214参照。

日本の親族集団を4類型に分けている。この地域は「マキ型親族集団」に属する。

(注5) ここでは成人(20才以上)している第1子を現世代とした。それを基に、父母の世代、祖父母の世代とする。以下その様な使い方を使用する。

(注6) 大柴, 1977: 184

(注7) 例えば, 米山 1967 蓮見 1973

(注8) 大柴, 1975: 73~84. 参照

ところで、このような変貌する中において人々の意識の問題はどうなのだろうか。簡単に変わったものもあるが、例えば同族への帰属意識などは根強く変わっていないようである。^(注9)又、例えば此处で取り上げる「憑きもの」や「崇り・さわり」の類も一見表面には表われてこないけれども、現在でも人々の意識の中でかなりの意味をもっている。

2 E村の「キツネ憑き」

「キツネが憑く」という時、それは個人に憑く場合と「キツネ持ちの家」として代々特定の家にキツネが憑いていたり、又憑いていたりする場合との二つに分けられる。つまり、個人に憑く場合と家に憑く場合である。ここでは個人に憑く場合について、主に疾病との関係を考える。家に憑く場合は、現在はほとんど意味を失っているが村落社会、さらにそこでの人間関係・精神環境を理解する上で必要となるため少し触れておく。

1) キツネ持ちの家

現在、E村内で「キツネ持ちの家」について言われるのは、AとBの2つの部落に於いてのみである(図I参照)。A部落は村の中心(役場の所在地)から8km程山奥に登ったところにあり、又、B部落は中心からやはり6~7km程山間に奥まった所にある。A、B部落とも奥地にあり、両部落は4km程の峠道を通じて往来がある。又、A部落は別の峠道を通じて隣のK村に、又さらに奥地に入り峠道を通じG県とも通じている。かつて徒歩の時代には、これら峠道は機能していたが、その後はさびれ現在では実際に行き止りの部落となっている。

現在、この「キツネ持ちの家」は住民の記憶の中に止めているのみで意味はもたない。しかし、祖父母の世代の人たちまでは、結婚の際の障害となり、「キツネ持ちの家」は敬遠していたのだから、全くその事が消失してしまっているというわけではない。

〔事例I〕 A部落のO家はKS氏の代の時財産を蓄え2代に渡り大尽だった。KS氏は他人に高利貸をして返済できないと担保に、田畑、山林などを取り上げ財を増していった。現在はKS氏から4代目になり家は零落れてしまっているが、当時家が栄えていた時の事である。峠を越えた隣のK村に、同じく財を成し栄えているP家があり、やはり「キツネ持ちの家」であった。そして、O家の娘がP家へ嫁ぐことになった。村の者は「両家がキツネ持ちでは、両方のキツネが喧嘩をして大変なことになるぞ」と心配して噂をしていた。両家は気にしながらも「そんな事はあるまい」と言って婚礼を挙げた。ところが、祝儀のその晩に婿の父親がキツネに食い殺された。(昭和50年10月、B部落T氏談。T氏は明治27年生まれ。81才で死亡したがこの話はT氏が20才代の時の事だという)。

〔事例II〕 F部落のR家は財産がたまってきて、A部落のキツネ持ちの家S家から土蔵を買って建てた。「S家は、金持ちだから自分の家も金持ちになるように」と言ってS家

(注9) 大柴 1977: 170~188

大柴 1975: 73~84

から買って建てた。建て終わった時、R家の隠居さまがキツネに食われて死んだ。「隠居さまの横腹に穴をあけてキツネが入り込んで埃が立った」と噂された。その後、キツネがどおなったか、どこへ引越したか何も話がないからわからない。(昭和49年8月、D部落 I 氏談。I氏は明治17年生れ、現在94才で健在である。昭和の初め頃の話だという)。

「キツネ持ちの家」の事例について記憶している人は少ないが、M村の老人たちは「キツネ持ちの家」について共通した理解と認識をもっている。それは「キツネ持ちの家はデインサマ(金持ち)である。なぜかと言えば、それはキツネが欲が深くて例えば買物の時でも秤の分銅の方にキツネが乗って荷を余計にかける。何かとキツネがシンショウ(財産)を蓄えるために働きをするからである。家の者は財産をためてくれる有難いキツネだから取り持って(大切に)他人に知られないように、天井などに祀っておく。キツネはその家の者には害を与えないが、家以外の者には憑いて禍いをする」。そして、キツネ持ちの家については「その家の者が欲深いのではなくて、キツネが欲深いのである。キツネ持ちの家の物をもらってくるとキツネが憑いてくるから、絶対もらってくるなと言った。しかし、それで茶飲みに行く人が減るようなことはなかった」という。

E村の「キツネ持ちの家」について他の事例も合わせ共通して言えることは、金持ちであり、それはある時期に急に財産を貯えた家であると言える。そして、村人がキツネ持ちの家に対して抱く共通感情は、(1) 羨望していること(金持ちで羨ましい) (2) 敬遠し嫌っていること (3) 特別視し差別していること(縁組みや親しく付合うことを避けている)である。

急に財を成した事はキツネのせいにする。そしてキツネは他の家には禍いを与えると信じて、それ故にキツネ持ちの家を嫌い避ける。人は嫌われ、敬遠され差別されたくないの、そのためには急に財産を成すことを慎み、富を得てもできるだけ目立ぬようにしたり人前に良く施したり、できるだけ人の羨望や恨みを受けないように振舞わなければならない。主に島根県・群馬県などキツネ持ちの家の分析から吉田が「村の既存の秩序に脅威を与えるような新興農家をキツネ持ちとすることが、村落構造維持・社会統制のメカニズムの一つとして作用したのではなかるうか」とし、「……憑きもの信仰は社会的・経済的地位の上昇にともなう摩擦を軽減させる潤滑油のような役割を果たした」と言っているように、ここでもそのような理解ができる。

なぜ、急に財産を成した家をキツネのせいにしたのか。この村落社会は(後述)極めて平均的な均衡を取り合い、又それを要請する社会である。別の見方でいえば、足の引張り合いで少しでも現状維持から飛び出すことを戒め抑えつけようとする力を働かす社会である。既存の秩序を動かすことは極めて脅威なのである。俄かに財を成すようなことは羨望であり脅威なのである。この事実は、いくら羨んでも努力して誰れでも成れるものではない。さりとて諦めることもできない。又、この事実を別の世界に追いやってしまう(絶交

(注10) 吉田 1973: 132。

なお、キツネモチは「貨幣経済の浸透によって生まれた新興成金に対する反感、そねみ恨みが働いていたに違いない」とし、その時期は、出雲地方の調査では、江戸中期に発生したのではないかと分析されている。(66, 67)

したり遠退けたり)というわけにもいかない。つまり、同族、近隣、村組織の絆で組まれた家と家の関係を断ち切ることはできないと同時に、人と人の付き合いも断ち切ることはできない社会である。しかし、その家が心の中にあることは常に脅威的なことであるのだから何とか取除かなければならない。このような葛藤は、どお処理されるのだろうか。結局、脅威的事実(俄かに財を成した事)はキツネのせいにして「キツネ憑きの家」として敬遠し、差別することで心を安めることができた、ということではないだろうか。

近年、村外通勤による生活圏の拡大や通婚圏の拡大など村落社会組織の変化にともない、従来のような人間関係は徐々に変わっている。一つの社会内で均衡を保ち、維持していこうとする村落社会の強制力を弱め、同時に人々の羨望や脅威の質を変えた。そのため「キツネ」を必要としなくなり、今や「キツネ」がいなくなった、ということであろう。

2) キツネに憑かれた人

(1) キツネ憑きと御岳講

キツネに憑かれた、ということは父母の世代の人々まではほとんど誰れでも語種として「あの人も憑かれた」、あるいは「ばかされた」という話をもっている。現在でも稀に老人から「あの人はキツネに憑かれたらしい」という話を聞くことがある。現在でもキツネ憑きの信仰は生きている。E村内で、キツネに憑かれた人の話を聞くのは、やはり前述の如くA、Bの両部落に集中的に多い。

ところで、このA、B部落にはかつて御岳講^(注11)がさかんであった。部落の全戸が講に加入していた時期もあったという。現在、講はなくなったが、その信者がA、B部落それからE部落に合せ4人程いる。かつて御岳講には行者も多くカミオロシ^(注12)の出来る修業をつんだ人が2~3人はいたという。彼らは占、キツネ落とし、加持祈禱や薬草の処方など行ない部落社会にとっては重要な役割を果していた。B部落には御岳堂があり(昭和51年まで建物が残っていた)昭和30年代までは、まだそこで講の集会を行っていたという。

キツネ憑きやキツネ落としの事、さらに崇りやさわり加持祈禱などについては、現在信者である4人と行者のTU氏(昭和51年死亡)とから話を聞いたものが主である。彼らについて簡単に述べると、(1)信者KK氏——A部落。大正2年生れ。兼業農家、本人は営林署勤務。父親は御岳講の行者であった。(2)信者KM氏——B部落。大正6年生れ。兼業農家、本人は農業、村の役職。父親はカミオロシのできる行者であったという。(3)信者KY氏——B部落。大正5年生れ。兼業農家、本人農業。信者KM氏とはイトコ(FaBrBr)である。(4)信者KY氏——E部落。昭和9年生れ。婿養子であるが、養子に來た家の祖父は

(注11) この村の御岳講は、木曾御岳信仰である。

「御岳講」については、桜井1971:155~160参照のこと。

(注12) 祈禱を行なうときは、神棚の前に、まず上位の行者が坐る、その人のことを「チュウオウ」あるいは「中座^{なかざ}」といい、この人は祈禱して神憑り^{かみおろし}することができる。チュウオウの次に坐る人は「前座^{まえざ}先達^{せんたつ}」といい、この人が、神様に伺いを立て、カミオロシをしたチュウオウつまり神と話をする。

神憑りになることを「カミオロシ」といっている。「カミオロシ」は厳しい修業をつんだ者でないといけない。又修業をいくらしてもできない人もいるという。

カミオロシのできる行者であった。没後、^(注13)霊神となって戒名が付けられ当時の信者たちの寄附で碑が建てられている。(5)行者TU氏——B部落。明治27年生れ。農業をしていたが昭和51年死亡。大正7年に「法者」の免状を取ったという。カミオロシはできなかったが、^{メイザセンゴツ}(注14)「前座先達」を勤め、キツネ落としや加持祈禱を何例も行ってきた経験者である。部落で最後の行者だったといえよう。

行者TU氏が長年の経験を通して語った事は(昭和48年～51年談)「昔はキツネ憑きが多かったが、最近世が開けてきて人間が利口になったから、キツネに憑かれる者はめったにいない」。そして「キツネに憑かれやすいのは、村から外へ出た時・女衆のお産の時・それから病気で体が弱っている時などがもっとも憑かれやすい」ということであった。

現在、信者は年一度遊山をかねて御岳山に登り、家にお札を祀る程度で「行」は行っていない。しかし、今まで行者TU氏に持ち込まれていたと同じ相談事が信者の所にも持ち込まれている。特にB部落のKY氏は、月平均3—4件、年間にして40件以上の相談を受けるという。「行者ではないから」と言っても頼まれ、結局加持祈禱も行なうようになり、「思召として受けた礼で充分お山(御岳山)へ行ったらこられるから信仰の力は有難い」と話していた。そして、最近「行」にも関心を示している。

相談を持ち込まれたり祈禱を頼まれるのは、B部落より他部落、他村からの方が多く、電話で受けることもある(この点に関する考察や相談内容については後述)。相談内容では「キツネ憑きは、此々20年ぐらい前からほとんどいなくなりましたが、祟り・さわりの類はまだ多い。世が開けすぎてかえってこの点の問題が粗末にされている」とKY氏は最近の傾向について話していた。

(2) キツネ憑きの事例

まず、E村で聞いた「キツネ憑き」の事例の一部を取上げる。

〔事例1〕K町のe氏は目が悪くてノガミの目医者へ行った(昔は眼病が多かった。K町、E村、N村、K村の人達は、N村の峠を越えG県にあるノガミの目医者へよく通ったという)。その帰りにe氏はキツネに憑かれてきた。TU氏はキツネ落としを頼まれ出かけていった。TU氏が、いくら祈禱しても取れなかった。仕方なくN村の行者を頼み一緒になりカミオロシをして伺ったら「正一位のキツネが取り憑いている」ということだった。キツネにも位があり高いキツネほど力も強く、こっちの腕もそれに適わなければならないから真剣だった。正一位と言えは偉いキツネだから簡単なわけにはいかない。その後、何度も通い祈禱をくり返し苦労したがどおしてもとれなかった。それで、家の裏に宮を祀ってそこに入って下さるようお願いした。それで、キツネは宮に入ってくれたのでe氏のキツネはとれた。e氏はその後元気になってふつの人になった。e家では現在でも宮があってキツネを祀っている。(昭和49年9月、B部落TU氏説。昭和の初めの頃の事でe氏は数年前に亡くなっている)。

(注13) 偉い行者であったため、死後、霊神となり祀られた。

(注14) (注12)参照。

〔事例2〕 E村B部落のf氏は、昭和42年26才の時に静岡へみかん取りの出稼ぎに行った。そこでキツネに憑かれた。急に様子がおかしくなり連絡を受け家の者が迎えに行き連れ帰った。部落のTU氏が頼まれて行くとf氏は、しきりと両腕で顔を隠すような恰好をしながら（キツネのような仕草）「TUさんはやだいな」と言いながら隠れようとした。キツネに憑かれた者は私（法者）を見ると恐れるからすぐ解る。それは、キツネが私を恐れるからだ。祈禱してすぐキツネはとれた。f氏はふつうになり、その後元気に働いている（昭和50年2月、B部落TU氏談。f氏は昭和16年生れ、農家の後取り。現在3児の父親であり部落の中心人物となり元気に働いている）。

〔事例3〕 A部落のkさん（明治25年生）は40才の頃、7人目の子供を出産した。その頃、近所の女衆3人と山ぶどうを取りに山に行った。山で何となく様子がおかしくなり2人から離れたので呼んだが木の影に黙って立っていた。家に帰ってから、ますますおかしくなりお湯に入ると言って小便溜に入ってしまったり、カミソリで首に傷つけたり、又イロリで坐って火箸で灰をいつまでも弄ったままじっと口を聞かなかったり、半年ぐらいこんな事が続いた。「キツネが憑いた」ということで3人の行者が頼まれた。何度もkさんの家へ通い祈禱を続けた後キツネは取れて元にもどった。その後kさんは、8人目の子供を出産したが、その子供は今で言えば小児麻痺のようであり4才で亡くなった。（昭和53年1月、A部落KK氏説。KK氏の父親は行者であったので父親はkさんのキツネ落しを行ない、当時KK氏はそれを見ていたという。なお、kさんは現在84才である。昭和52年8月筆者が訪ねた時の印象は、端正で気丈なおばあさんという感じであり、昼は若い者が勤めに出た後の留守をして家の雑用に元気で動きまわっていた）。

〔事例4〕 N村のg氏は、中気になって毎日家でぶらぶらしていた。そのうちg氏はキツネに憑かれて夜になると家を出て外を歩きまわるようになった。それから一週間も、どこかに行っていなくなり村中で大騒ぎになって探したら川に落ちて死んでいた（昭和49年6月、60才代で死亡）。「キツネに騙されて毎晩つれて歩かれた」と親類衆は言っている。g氏が死んだ後、家の者が「キツネに家にいられたら困るから」と言って宮を作りキツネを送り出した。（昭和49年9月、D部落IS氏説。IS氏は明治17年生、現在94才で健在である）。

〔事例5〕 K町のhさんの父、祖父は2代続いて御岳講の行者であった。hさんは婿取りであった。hさんは信仰には全く無関心でいた。その人にキツネが憑いて困った。N村、E村からも行者仲間が出かけて行って祈禱をくり返しやっとならした。そのあとhさんは信心を始め素晴らしい行者になった。憑かれた時は「また来やがったな、チクショウ」と言うのと、たちまち顔付きも長くキツネの様になり人柄も変ってしまい、ゴボン、ゴボンという様な、まるでキツネのような咳をしだした。又、「この衆は男の子をほしがっているけど、おれがじゃましているだ（hさん夫婦には子供が生まれなかった）」と言った。（昭和53年1月、B部落KY氏説。hさんは昭和51年に亡くなっているが、その前までは信仰を通じてKY氏と逢っている。又hさんのキツネに憑かれた時にはKM氏の父が行者でキツネをとった）。

〔事例6〕 B部落jさんは、お稲荷さんのお賽銭を取って返さなかった。それでキツネが憑いてしまった。行者が頼まれて祈禱すると、キツネのような口をしてその径文をまねて読んでいるばかりで全く効き目がなかった。結局キツネに食い殺されて死んだ。(B部落KY氏談。この時の行者もB部落のKM氏の父が頼まれたという)。

(3) キツネ憑きとは何のことか

「キツネに憑かれた」とは、どのような状態を言い、いったい何の事であったのか。

「キツネに憑かれた人」は常の状態ではなくなっている。ある時を境に急に常の心が通い会わなくなる。常の言動ではなくなり別人のようになる。外傷とか、苦痛、疼痛を訴えることではなく、それは精神的に常の状態ではなくなることである。

ところで、精神の異常を表わすのにこの地域には「気狂い」とか「気が別になった」「気がふれた」などの言葉がある。これは又、「キツネに憑かれて気が別になった」とか「キツネに憑かれてじょうぶ(全く)気がふれたようになって……」という言い方もする。

両者の区別は、「キツネ憑き」の方は憑かれたような突然の心の変化が多かったようである。又、外見的にはいかにもキツネの様態になる(例えば事例2, 5, 6)ことがいわれている。しかし、外見的(症状)から両者を判然と区別することは出来にくいものもあった。実際的にはそれを決めるのは(キツネ憑きによるものか崇り、あるいはさわりによるものかなど)^(注15)行者が祈禱して、ゴジンチョクをとってみて決定することである。

両者は、いずれも精神の異常を主症状としているが「キツネ憑き」と「気狂い」は別のものと考えられている。原因は本質的に異なるものと理解しているようである。「気狂い」は統を引く(遺伝する)が「キツネ憑き」は統を引くことはない。「気狂い」は治せないが「キツネ憑き」は、キツネをとれば元に(正常に)戻ると考えている。そして実さい「キツネ憑き」は祈禱師にキツネをとってもらい元の状態に戻っている。(どおしてもとれないものもあったらしいが)。

次に、行者TU氏が「キツネに憑かれやすい人」について語ったことについて考察する。

(a) 村から外に出た時にキツネに憑かれやすいということについて

E村に限らずこの地域一帯で聞かれるキツネ憑きの事例は、外に出て(部落外あるいは村外)憑かれてきたという話が多い。外に出たことで、即ち自分の属する社会とは別の社会環境に接したことを契機にしてキツネに憑かれている。(事例1, 2)これは、個人の心理的体験として急激に異った環境に接したことで心に変化を来たしたのである。つまり不適応症状の現われと見なされはしまいか。自分の社会から他の別の社会に身を置いたことで、個人は急激な環境変化による刺激と同時に行動様式の変容を迫られる。

この事で例えば、文化変容^(注16)(acculturation)が急激に強いられた時人々は心理的不適応

(注15) 行者が祈禱して「御神勅」を伺い決めること。

(注16) 蒲生 祖父江 1969: 157

「独立の2つ以上の文化が直接に接触することによって、その1つ、あるいはすべての文化のシステムに変化が起こる現象」1935。レッドフィールド、リントン、ハースコヴィツの定義による。

を来し「優勢な文化に対する反応や抵抗（あるいは強い慣れ）があって、それらが現実には達成不可能とみられるとき、個人の内面には緊張、不安、欲求不満の錯綜した心理状態(注17)がつくり出される」といわれている。この事例として、すでに「ゴーストダンス」や「ヴァイララ狂信」(注18)などが取上げられているが、これらはいずれも急激な文化変容に曝された社会が、ストレスと自己破滅に対する反動を集团的、組織的行動をとって表現しているものである。その表われ方は狂人的でさえある。

「キツネ憑き」の場合は、個人が異質な文化環境の中に曝されるということ、又その時間的急激性という点において、その個人の受ける心理的ストレス、混乱は極めて大きい。その時の衝激的な精神混乱を来した状態、つまり文化ショック（culture shock）の状態が「キツネ憑き」だったのではあるまいか。

しかし、カルチュアショックだけで「キツネ憑き」の説明は納得できない。過疎地域における精神障害者の動態を分析されたものがあるが、この中で荻野氏は分裂病の発病契機(注19)として、(1) 大都市に出てきた若者が一般に地位、身分、生活条件が確立してないこと。(2) このような生活条件の不確定な状態からくる持続的緊張、(3) 大都市は自分が帰一できる集団ではないこと、つまりアイデンティの喪失状況におかれること、などを必須条件として上げておられる。(3) については、さらに、都市で自分を帰一できないと言って家や故郷も深刻な葛藤内容を内蔵するところとなっていること、即ち郷愁の対象となりうる故郷との同一化にも失敗せざる得なくなっている状況を述べておられる。(注21)そして、これらの事から「急性精神病患者たちの発病機制は文化的ショックという社会精神病理現象として単純に理解するだけでは治療の見地からも十分でないことが分かる」としておられる。(注22)

E村において精神障害者は、従来の「気狂い」という言葉に代って、また異質な響きをもって語られる。この精神障害者は近くの町村と比較して多く、そして分裂病発病の契機は、就職、進学など村外に出た時がほとんどである（具体的なことは除く）。上記のような状況背景をもって理解できる事例が多い。ところで、このような状況背景を契機として発生した精神異常と「キツネ憑き」は無縁のものではなかったと考える。E村は貧しい奥地の村であり昔から出稼ぎのあったところである。分裂病発生が単なる文化ショックという理解でなく、深い社会文化的背景が関わっている事の理解が必要である。さらに人々の生活基盤としての経済的要因も密接に関わっている。

ところで、文化ショックやアイデンティ（identity）喪失状況が、分裂病発生要因の条件としてあるとして、それではなぜこのよきにショックを受けやすかったのか（次の事例）、

(注17) 江淵 1975 : 72 (632)

(注18) 江淵 1975 : 71 (631) 参照。

石田 160 : 174参照。

(注19) 荻野 1977

(注20) 荻野 1975 : 62~63

(注21) 荻野 1977 : 239

(注22) 荻野 1977 : 238

あるいは受けやすいのか。又、村落社会を「ふるさと」とするアイデンティティは何に依っていたのなのだろうか。

〔事例a〕 B部落のKT氏（明治35年生れ）は子供の頃外へ行って（部落外）帰ってくるとよく具合が悪くなった。すると、おふくろがキツネを払うようにとお呪いをしてくれた。それは烙燬を焼いて頭の上にかぶせて（まねをする）山桃の枝でお尻を叩いてくれた。（昭和52年10月、KT氏本人談）。

〔事例b〕 B部落のKAさん（明治36年生れ）は隣りのN村から嫁いできた。実家の弟の子供（KAさんの甥）は、E村H部落の親類によばれて行ってくると必ず頭が痛かったり熱が出たりした。キツネのせいだと言った。（昭和52年、KAさん説）。

以上の2例は子供（少年）であるが、現在筆者の知っている大人も共通したことをいう。例えばD部落のITさん（50才代、N村から嫁いできた）、H部落のKTさん（50才代、同じ部落で生れ嫁いでいる）は、他所へ行ってくると疲れる、頭が痛くなる、村へ戻るとほっとするという。

部落は一つの血縁社会でもあった。血縁を通して一身同体的な認識をもち、同族への帰属意識を通して自己の存在が規定されていた（現在も）。山奥の小集落は外に対しては閉鎖性を、内に対しては同族そして部落への凝集を志向した。それは、部落内に自己を埋没させてこそ安住の地であり、精神の安定が得られる。逆に部落から遠ざかる程（心理的、物理的にも）自己の不安は強くなり安定を失うものであった。部落における自他の関わりと、部落外に出た自他の関わりは全く異質のものになる。自分の部落での他人は、共通の認識をもった解り合える関係がいつも出来ている。個人は完全に「個」としての独立を成しえていないのだ。部落社会が「個性」を抑圧し、一つの部落に「個」を埋没させることを要請するからだ。かつての、閉鎖的な（地理的に）孤立的な部落社会ほど、この傾向は強かったはずだ。例えば「旅行先で集団を成して歩く」といわれる日本人は、このような部落社会を本質的基盤として生活してきた歴史的背景があるからだと言えよう。他所へ出た者は、その時の人数が少ないほど個人が受けるショックは大きいことになる。文化ショックという時、ショックを受ける個人はその社会生活背景の中から様々な変数として存在しているのであるから、その社会の理解は無視できない。

以上みてきたような状況背景の中に生活している者であるからこそ、他所へ行った時、彼らはショックを受けやすく、従って精神障害をおこしやすかったと思われる。この事がつまり「キツネに憑かれやすかった」背景であり、又「キツネに憑かれた人」が多かったという事だったと考える。

(b) お産の時キツネに憑かれやすいということについて

妊娠、産褥時における神経精神性疾患発症の問題については、最近になって注目されだしているところである。「妊娠、分娩、授乳、育児という過重な精神的身体的負担に加え性腺機能の変転が目まぐるしい妊産褥婦では、身体的にはもちろん精神的にも管理が重大なことは、いうまでもないところであるが、周知のように従来は身体面の管理のみに重点

（注23） 妊娠、出産、産褥を含めた意味で使っていた。

がおかれがちで精神面についてはなおざりにされてきたきらいがないでもない。^(注24) 又、従来の産婦人科の医療チームは「妊娠、分娩、産褥を通してその身体面については積極的に取り組んできた。しかし精神、心理面には従来の医学教育の偏重より無関心のきらいがあった^(注25)」としている。

なぜ、この時期に精神障害の発症が多いのかについて久松、山村は産後神経症の2つの要因として「一つは内分泌的要因、今一つは心理的要因である。内分泌には産後の急激な内分泌の変動、特に間脳下垂体系また甲状腺（特に橋本病）との関連は無視できない。心理的には患者の生活史に根ざした未熟な人格と、夫を中心とした対人関係の問題が深く関与している」と述べておられる。ここでは産後神経症の2つの要因として上げているが、もちろん産後に限らず（久松らも述べておられるが）、このことは性腺機能、内分泌系、自律神経系の激しく変化をうける妊娠、産褥期全般について言えることであろう。

さらに、森らの調査で「性腺機能の転換期を契機として発症した神経、精神疾患が増加し、とくに高年期と分娩後に急増の傾向を示している」^(注27) 事実が報告され、その原因は「最近の急激な社会構造の変化で、婦人では精神的あるいは身体的負担が増しつづけるためか」と推測されている。^(注28)

「高年期と分娩後に精神疾患の発症が多い」ということが、最近の増加傾向にあるのが事実としても、この問題は昔からあったことではないだろうか。むしろ、地域によっては昔の方が多く発生していたのではないかとさえ、私は考える。このことが「お産の時キツネに憑かれやすい」ということと関連があったのだと思う。

なぜ妊娠、産褥時に精神疾患の発症が多いのか。内分泌要因や心理的要因、なお最近の社会構造の変動からくるストレスもさることながら、家庭、社会における女性のこの時期の心身の負担は昔からほとんど改善されていない。例えば、上記の「社会構造の変動」からくる心身の負担とは異った意味で、かつての農村での（現在でも）この時期の負担は厳しいものであった。ここで述べる迄もなく、農家の嫁の立場は過酷であった。家族制度、そこでの人間関係などの負担と、もう一つは衣食住の問題とくに栄養問題がある。現在でも農村における主婦の貧血は問題となっている。^(注29) 地域によっては30%以上の貧血者が出る。極度の貧血は精神症状を呈する。そして、妊娠時貧血傾向が現われることも事実である。

なお、この地域には「チャンマイ」という言葉がある。これは「血病い」のことであるらしく、お産や更年期の時期に現われる女性特有の体の具合の悪いことを一口に「チャンマイ」と言っている。そして「チャンマイ」は病気というより、この時期の女性にはほとんど当然にあるべきことのような理解をしている。「チャンマイ」は病気である、という認

(注24) 森、沖、大川 1973: 46

(注25) 岩淵 1977: 27 (481)

(注26) 久松、山村 1977: 18 (472)

(注27) 森、沖、大川 1973: 46~49

(注28) 「更年期」のことだと思う。森らの調査結果表1参照。

(注29) 横山、大柴、高山 1971: 234, 表3参照。

51年度のE村の貧血検診でも、部落により差はあり、又、受診率も60%代であるが、貧血率は40~60%を示した。Hb値で男 14.0g/dl 以下女 12.0g/dl 以下を貧血者とした。

識はもっていない。

これら、社会関係、衣食住（特に食生活）など生活環境からくる要因が、性腺機能の変転期という内分泌的要因に相乗的に加わって「お産の時」の精神障害の発生を多くしていたにちがいないと思われる。「お産の時キツネに憑かれやすい」事と、「チャンマイ」とは同じ状況背景の中から出てきていることである。妊娠、産褥時の精神障害が「キツネに憑かれた」ということだったのである。（事例3参照）。

(c) 病気をして体が弱っている時キツネに憑かれやすいということについて

近年死因別死亡の第一位は脳血管疾患だが、それは農村には特に多く農村老人のほとんどが「中風（あるいは中気）」で死亡する。ところで中風の大半は性格変化を来す。喜怒哀楽の異常を来した時には夜中大声を出したり泣いたり徘徊したり、意志の疎通がつかなくなるなどの精神症状を表わすものが多い。気丈でしっかり者が、常の心を失い別人のようになって泣いたり、赤子のようになったり、夜中徘徊したりするようになった時、それは「中風」の病気から成るという理解でなく「キツネにとり憑かれてしまった」としか思えなかったのだろう。従って病気をして体が弱っている時、キツネに憑かれやすい、という理解になったのだろう。事例5もその例である。

次に病人やその家族の生活はどうだろうか。体が衰弱し、働けなくなった時、家族の生活負担はさる事ながら病人の精神的苦痛は相当だったにちがいない。ことに昔は医疾機関が近くなかったこともあるが、主には経済的理由から医者にみてもらうことは余程の場合であり、一般には贅沢な事としていた。病気がいつまでも捗々しくなく働けない時、病人は病気の苦痛以上に家族の負担を思う気がねでいっぱいだったと思う。現在よりもまだ社会保障のない時代にはなおさらのことであつたろう。家族の負担は親類、さらに組や部落への負担である。病人の気がねは親類、組さらに部落に対する気がねでもある。

病気になった時の周囲への気がねは、昔だけの話ではない。昭和50年51年にE村で自殺した者のうち、2人は家族への経済的負担を苦しめての事だった。一人は40才男性、慢性肝炎で長期入院をくり返していたが、自宅に帰った時家族の負担を苦しめてノイローゼ気味になり自殺した。もう一人は40才代女性。脳卒中で入院し軽度運動障害を残して軽快退院した。自宅での身のまわりのことはできていたが、働けないことや家族への迷惑を苦しめて農業自殺した。

器質的疾患が原因でノイローゼや自殺に至る窮迫的心理状況には、それなりの生活事情がある。社会保障をかかげる現在であっても、長期のあるいは重症の病人があると、そのことは一家の生活破壊につながる。昔は、なおさらである。病人が受ける心理的圧迫感、精神的負担は著しく、それが病気（器質的）に悪影響を及ぼさないはずはない。又、その心理的圧迫感、精神的負担からノイローゼや自殺、さらにうつ病、分裂病などの精神障害を来しやすいことは予想がつく。病院に入院中の外科的、内科的疾患の患者で、精神障害が現われ精神科へ転科するケースがしばしばあるのもこの種の問題と共通したものがあろう。

器質的变化が、心理的精神的に重大な影響を及ぼし、又逆に心理的器的变化が、器質

的变化に影響を及ぼすことは近年医学が改めて「心身医学」^(注30)として取上げているテーマである。

「心身一如」「色心不二」は当然の事であるが、この心身の関係の媒介変数には、社会的・経済的、さらに村落社会特有の文化的要因（後述）があることを無視するわけにはいかない。

以上みてきたように病人（器質的疾患）をとりまく生活背景が、精神障害を発生される要因を数多く内包させていたといえよう。したがって「病気をして体が弱っている時キツネに憑かれやすかった」という結果を生んだと思う。

3) キツネ憑きの意味

以上、E村での住民の生活や話の内から「キツネ憑き」の背景を医療的視点から考察してみた。

「文化と狂気」の問題、「妊娠、産褥期の精神障害」の問題、そして「心身医学」として取り上げられている心の問題など、これらは近代医学が医療の反省の内から改めて近年取り上げたテーマである。だがこれら疾病問題としての事実は、すでに今までに「キツネに憑かれた」という形で人々の生活の中にあった事であり、また現在もあることなのだと思う。近代医療が「文化と狂気」「妊娠、産褥時の精神障害」「心身医学」の中で取り上げたものと、「キツネ憑き」の意味の差を理解するために、もう一度まとめてみる。

1つは疾病概念の違い、つまり「病気」認識の差がある。昔の人は、外傷や発赤・腫脹・発熱・黄疸など、それから疼痛や口喝を訴えるなど明らかに目にみえる症状を呈し訴えがあるものは病気と考えていた。しかし、器質的变化の見られないもの、つまり心が通わなくなったとか、因果関係について理解不可能なものについては病気と認めていなかったようだ。このことは、昔と言わず現代でも同じである。例えば今でも、血圧が200と120 mmHg あって受診を勧めると「どこも痛くもなく働いているのに病気のはずはない」と言い張る人や、貧血で Hb7.0g/dl しかないことを話しても「食べ物がよく食べられるし、働いているから病気ではない」と主張する人など、この類の人たちには再々逢う。心理的、精神的変化などについてはなおさらである。現代医学も「精神障害」の疾病概念についての捉えにくさを示しているように、精神的変化は「病気」としてとらえにくかった。

2つ目に、まずこの社会の信仰として、つまり集団表象として「キツネ憑き」があったということがいえる。この信仰があるから「キツネ憑き」という現象が認識され存在していたと言える。従って、症状はキツネのような現われ方をする。例えば「顔付きもキツネのようになり、キツネのようなゴボン、ゴボンという咳をする。アブラゲがたべたいと口

(注30) 中川 1967

(注31) Lévy-Bruhl (山田吉彦訳), 1653 : 15. 参照。

走る、火を見ると恐れる。手を顔のところに入れてまるでキツネみたいな恰好をする」などである。キツネに憑かれた人の全部がこのようなになるとは限らないが、ほとんどに共通して言えることだという。

3つ目に、精神変化を来す条件があったこと、つまり外に出た時、お産の時、病気で体が弱っている時である。これらは、身体の器質的条件と、そしてこの村落の社会、経済、文化的状況背景があった。

「キツネ憑き」は単なる非科学的な迷信ではない。「集団の表象または民間信仰の問題である」こと。^(注32)そして、さらにキツネ憑が民間信仰を生み、存続させてきたのは上記のように疾病と、その疾病を生む社会背景とが互いに密接不離の関係にあって、その中から出てきている事であると考ええる。

(注32) 吉田 1972: 8

参 考 文 献

- 1950～1975「農林業市町村別統計書」農林統計協会
 1950～1975「E村々勢要覧」
- 蒲生正男 1960『日本人の生活構造序説』誠信書房
 米山俊直 1967『日本のむらの百年』NHKブックス
 蓮見育彦 1973『現代のエスプリー—日本の農村—』No.66 至文堂
 吉田禎吾 1973『日本の憑きもの』中央公論社
 桜井徳太郎 1971「民間信仰と現代社会」『日本人の行動と思想9』評論社
 蒲生正男、祖父江孝男 1969『文化人類学』有斐閣双書
 江淵一公 1975「文化変容と行動変容」『教育と医学』慶応通信
 石田英一郎、泉 清一、宮城音弥 1960『人間の行動—現代文化人類学5』中山書店
 荻野恒一 1977『過疎地帯の文化と狂気』新泉社
 荻野恒一 1975「文化と狂気」『現代思想9—精神分裂病』青土社
 森 一郎、沖 利貴、大川 敬 1973「妊、褥婦と精神障害」『助産婦雑誌』27巻5号 医学書院
 岩淵庄之助 1977「母性の不安と妊娠過程における心理的変遷」『助産婦雑誌』31巻8号 医学書院
 久松憲二、山村一二三 1977「産後神経症の看護と母親教室」『助産婦雑誌』31巻8号 医学書院
 横山孝子、大柴弘子、高山千恵子 1971「八千穂村における貧血の実態とその追跡調査」『日本農村医学研究所年報』第2巻
 中川四郎 1967『心身医学』創元社
 Lévy-Bruhl, 1910. Les Fonctions mentales dans les Société inférieures. (山田吉彦訳『未開社会の思惟』岩波書店, 1953年)
- 大柴弘子 1975「佐久地方—村落における部落組織の変容」『近隣組織の構成と展開—社会伝承研究IV』社会伝承研究会
 大柴弘子 1977「マケ同族にみる村落構造特質および人間関係—疾病事例をめぐって—」『民族学研究』42巻2号